

# 小城の歴史

柳川安信

## 故小城侯鍋島直虎子

### 修養とは歴史を熟読するが近道

太田保一郎

子は佐賀の本藩、鍋島直正公（閑叟公）の子、故直大侯の弟、故蓮池侯鍋島直房子の兄に当る。小城鍋島家第十代直亮公は三十五歳の壯齡で歿せられ、お子サンは唯春子姫一人であったので、養子として小城第十一代の最後の藩主とされたのである。容貌、氣象、学問まで、よく父君に肖られた名君であった。閑叟公の御学問は、人君学即ち人に君として世を統治する学問で歴史が御好きであったといふ。歴史と申しても学究先生が孜孜屹々として考證に耽るやうな態度ではない。歴史を資治の学と看られたのである。又経学は、王陽明の知行合一主義に興味を持

たれ、詩文章は、蘇老泉、東坡父子及陽明に私淑せられたかのやうに思はれる。

直虎子も、亦歴史が御好きで、常に脚近者に向て、歴史は読むべきものだ。歴史を読めば、人間が生きてくる、仕事が活発になる。経学ばかりでは、軛もすれば因循に流れ、固陋に陥る。経学をするなら陽明の傳習録を読むがよい。併し大義名分の論に至ては、朱子の説は立派なものだ。徳川幕府三百年の泰平を致したのは、程朱の学説が、大に與つて力あるのは勿論だが、又幕府を倒したのも、亦程朱の学説に淵源すと申さねばならん。歴史と経学とを両翼として、



第11代 小城藩主 鍋島直虎  
（「佐賀」所載）

国家社会の変遷する所以を知らなければ、政治も、法律も、経済も正鵠を得た施設は出来ない筈だ。又苟も一国一郡に君たる者は、人の賢愚、才不才、忠と奸、正と邪善と悪、質朴と佞偽、剛毅と詭柔などを見分る能力、即ち人を知る明といふものを養はねばならん。此眼力のない者は、国を治むることとはとても出来ない。のみならず家を滅し、身を失ふに至るも、決して珍らしくはない。此活眼は天稟にもよるが、又修養にもよる。修養とは歴史を熟読するのが、最も近道であると、語られてゐた。

子は、又よく四書（大学、論語孟子、中庸を四書といふは朱子より始る）を読まれたが、中に就いて、最も論語を愛読された。晩年に至りて、余は世故の閱歴を積んで、益々論語の深旨と、其難有味を覚つたと申されたといふ。以上子爵の御話は、後輩たる我等の服膺すべき言である。子爵は、多年英国に留学せられよく英語に通せられたが、彼地にあつて見聞せられたことは、日記体の文で綴られた間々交ふるに漢詩を以てせられたものが、大冊をなし文体詩風識見ともに実に父君に髣髴たるものがあると云ふ。但筆者は其を拜見せざるを憾みとしてゐる。

昭和九年八月

佐賀郷友（桜陰漫録）

筆者太田保一郎先生は元学  
習院教授。一ノ坪に居住。  
昭和二十六年九十二才で死  
去。

## 桜岡

乾山 韓山夫 何秀拔  
祇水 何冽清  
吾稟山水氣  
生長桜岡城  
讀書雖不博  
頗識古人名  
大哉紀武内  
六朝乘國約  
賢哉管相公  
才德実絶倫  
建武中興日  
藤楠 藤黄門 楠中將 各忠臣  
其他多国士  
所希此数人  
吾将遂此志  
顧問岡上桜  
岡花笑不答  
奇香薰曉晴

富岡敬明  
（雙松山房詩史）

題字は 小城中学校長

柳川安信氏

天山は、標高一〇四六・二メートル、高い山の少ない本県では経ヶ岳や脊振山につぐ奥内屈指の高山である。山頂は樹木がなくベニールをぬいだような女性的な山容を呈していて、古くから天山神の鎮座する霊山として崇拜されてきた山である。

天山神が正史に初めて現われてくるのは平安時代の貞観二年(八六〇)で、従五位上を授けられたことが三代実録に見えている。この貞観二年に神階が加えられているのは、田島神(呼子町加部島)・荒穂天神(基山町)・予等比咩大神(大和町河上神社)・久治国神(白石町)・金立神(佐賀市金立町)と天山神(小城町)であるが、平安時代の正史に見えている奥内の神には、その他に、稲佐神(有明町)・堤雄神(江北町)丹生神(塩田町)・甘南備神(大和町)・脊振神(東脊振村)・白角折神(神崎町)・葛木一言主神(三根町)などがある。なお、天山神は仁和元年(八八五)に正五位下を授けられている。三代実録には、全国各地の神々の神階授与が数多く誌されているが、その後には当時における社会不安の深刻さと古代国家の動揺とが秘められているように思われる。しかしこのように神階を授けられた神々はその神々を中心とした強力な社会的集団がすでに形成されていたという歴史的事実を反映しているものではなからうかと考えられる。

呼子町の田島神を除き、他の神々は山上や山麓に鎮座する神々であって、その神々の鎮座する山麓平野の農耕社会が古代においてすでに相当に発達していたことを物語っているようである。わが国における山の信仰は、その歴史が極めて古く、信仰の内容も相当に複雑であろうと思われる。しかし、農耕社会が発達した平安時代における山の信仰は、水田耕作と密接に結びついた信仰へと変化してきていたことが一応考えられるのである。大和町の予等比咩大神(河上神社)や塩田町の丹生神は、それぞれ川上川や塩田川の要地に鎮座して、その水脈を利用する農耕社会の鎮守として奉祠されており、水神としての神格が極めて強いように感じられる。平安時代の正史には、祭神の名は記されていないので、天山神がどのような神であるのか現在明らかでなく、また、当時から「てんざん」と呼んでいたのか、または「あまやま」と称していたのかも確めにくい社記によると、天山神は湍津姫命の宗像三女神であって、遠く文武天皇の御代にまつられたと伝えられている。しかし、江戸時代の寛文年間(一六六一)は、大木惣右衛門が編述した「肥前州古跡録起」には、「岩倉天山大明神、本地弁財天の尊靈なり。」とあり、また、「晴氣の庄、天山宮弁財天の

# 天山神雑考

## 木下之

尊靈なり」と誌されており、天山神社上宮の石殿にも「天山弁財天石社」とあって、神仏習合時代には脊振山と同じように弁財天の鎮座する霊山として崇められていたことが知られるのである。

特に注目される点は、弁財天が天山に飛んで来られた時にお乗りになった牛は、石となって今も牛谷というところにある。むかしから雨乞いをする時にはこの石牛の鼻に白布をつけ布引きが天山の頂上からこの布を引くと、お経をおげ神歌をうたって、この石牛の背中に白米を降りかけると必ず雨が降るといふ靈験が伝えられていることである。弁財天は、仏典にお

いては水神としての神格を有していられることと合せ考えて、天山神は古く農耕社会における水信仰と極めて深い関係にあったことが知られるのである。

天山の八合目あたりに天山神社の上宮があつて、杉林と年ふりた神池のちかし出す静かな神域に、享保五年(一七二〇)に建立された石殿が奉安されている。また、中宮は、小城町川内分校の近くにあり、一個の巨石の前にささやかな拝殿があつて、巨石を神体として祭る巨石信仰の名残りを今にとどめている。

蔵、小城町晴氣、厳木町広瀬の三か所にある。この天山神の下宮は古くからの天山の登山口にそれぞれ奉祠されているものであろうと推定されるのであり、三社ともに天山から流れる川のほとりに鎮座しているところに水神として神格がうかがわれるとともに、この天山の水系を掌握し支配していたであろう古き世の天山神の勢威がまたしのばれてくるのである。

奥内には、古き由緒を有する神社の数は決して少なくない。しかし、下宮が三ヶ所に分散して鎮座しているのは、この天山神においては他にその例がない。この点、天山神は実に特色のある神であつて、学的興味もまたつきないものがある。

## 川上川(嘉瀬川)の上流に当る富士町に淀

行する山麓の要路に河上神社(淀姫・予等比咩)、川の下流に当る佐賀市内に与賀神社と本庄神社があるが、ともに祭神は姪姫であつて、ともに欽明天皇の御代に創建されたと伝えられている川上川の水脈を利用する農耕社会の発展の歴史をそれぞれの神社の創建が物語るものと考えられ、この四社の創建はそれぞれ時代が異なっているであろうといふことは疑う余地のないところである。塩田川の流域には、上流の嬉野町不動山から下流の鹿島市北鹿島町の五宮神社まで五か所に丹生神が奉祠されてい

このように川の流域に沿って同一神が奉祠されている例は、川上川や塩田川流域のみでなく、鹿島市の中川にもその例が見られるのである。このような河川の水利や水害防除などを掌握し支配していたと推定される神々は、古代国家の庇護のもとに社運をのばして繁栄していくのであるが、その神々の神格も次第に変遷していったことが当然考えられるのである。

そして、平安時代にすでにその名が知られた神社で今日なお水神的神格を伝えているのは、ほとんど稀であつてその神社由来や神格もほとんど後世の時宜に適した作文であるといつても過言ではないように思われる。河川の流域を探索すると、天満宮、八天狗などの社や石祠が多く見られるが、その大部分は江戸時代の創建であつて江戸時代を迎えるともはや古代の神々は水神としての神格を完全に脱皮して、ただ鎮守的・産土的存在に生きつづけていたことが知られるのである。打ち続く水害に悩まされた農民たちは在来の神々の神格を否定し、災害防除の神として新しく天満神や八天狗などを奉祠して、その神力にすがらうようになっていくのである。天山神もやはりそうした歴史の流れの中で、他の神社と同じ変遷をたどりつつ今日に至っているのではなからうかと考えられるのである。

戦乱の中の九州の豪族

阿蘇惟直と阿蘇家の背景

(2)

登盛丸金

菊地と共に勤皇の志となる

南北朝の対立

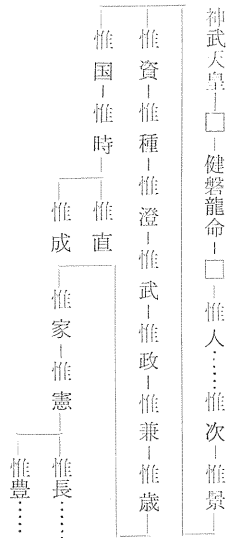
蒙古来襲以来の社会に乗じて延臣による政權恢復運動は絶えず行われたが、後醍醐天皇は武士を参じて鎌倉政權を打倒し、天皇を中心とした旧貴族の政權統一運動を樹立した。しかし、久しく政權を離れていた公家は政治の実践の不馴を示し、貴族の榮華を平安の昔に追つたに過ぎず、これに反して武士を中心とする政權樹立が鎌倉幕府の打破の功臣である足利尊氏によって開始された。

これで南朝が吉野に後醍醐天皇を、北朝が足利尊氏を中心として京都に對立した。われ／＼は「太平記」「日本外史」等を読んで吉野朝廷の忠臣達の涙ぐましい努力には、実に人間の感情で感激させられるものがある。

九州探題北条氏の滅亡

九州の方でも、九州探題北条英時は一族北条規矩高政をして、菊地、阿蘇兩氏を攻めんとして、元弘三年(一三三三年)三月二十一日高政は、阿蘇大宮司の館を攻撃して、二十九日に遂に陥し入れたので惟直も、菊地武重も、苦境に陥るに至つた。しかし武重の父武時が博多の方から打挙げた勤皇の烽火は九州諸国は勿論、全国の武士たちに感動させ、同年五月には京都の六波羅、同月二十二日には鎌倉、二十五日には、北条英時が攻め滅ぼされ、ついに北条氏の天下は崩壊した。

これによつて、菊地武重は朝廷に召され、弟武敏、武光等は肥後に残つた。この様な事態に足利尊氏が野心をいだき、北条時行の乱



阿蘇家系図 (肥後史談より)

を機とし、関東に討伐に行き、そのまま鎌倉に残り反旗をひるがえした。これに対し朝廷は新田義貞らをして鎌倉を攻めさせる事になつた。

建武二年十二月箱根で相戦つたが、官軍の中に裏切が出来て、大敗に終り、一応京都に全員引上げた。これに乗じて、尊氏は西上して京都を攻めたが、新田義貞等に打破られ、瀬戸内海から、九州の方へ落ち延びるに至つた。

この報告を早くも知らせたのが菊地武重で、報告を受けた兄武重の留守を預つていた弟武敏等と阿蘇惟直、惟成兄等と惟澄等は共に勤皇軍を中心とする九州勢は尊氏の九州南下を迎撃して、粉砕せんと北上し箱崎に入り、尊氏の近づき来るのを今か／＼と待ち、体勢を整えた。

しかしこの様な事態の時に、豊後の大友氏、筑前の少武等豪族は北条高時を攻める時から変心して菊地、阿蘇兩氏に協力せず。

尊氏西下と多々良浜の戦

建武三年一月足利尊氏、直義兄弟は都で、新田義貞らに討ち負けけ都を逐われ、九州に西下した。供に島山、細川、今川、千葉ら約五十余騎(尚千葉は胤貞のこと)

また九州探題北条英時が討れてからの九州の三豪族、大友、小武島津を首として、或は上洛して王化に随分ものもあり、又在国して將軍の意に應ずるものが多くなつて来た。

藤原隆家 ── 経輔 ── 則隆 …… 武時

武重 武敏 武光 ── 武政 ……

菊地家系図 (肥後史談より)

菊地武敏と共に北進し、先ず少弐氏の本拠地太宰府を攻めるため高良山に陣を取つた。この事を知つた少弐氏は、これを討ち破るため高良山に攻め入つたが水城の渡りで一人残らず破れた。その頃尊氏兄弟は菅原浦(福岡県遠賀郡芦屋町)から上陸、宗像の方へ向つていた。こゝに於いて、少弐を破つた破竹の勢いで、菊地武敏、阿蘇惟直等の勤皇軍は高良山から箱崎の松原の方に陣を移した。かくて延元三年(一三三八)三月二日箱崎の多々良川を境として(福岡市東部)対陣した。

多々良川とは、東は数里の平野続きで、西は松原で続き、北は博多湾に続き、南は丘陵の帯が連つている。肥前業書『九州治乱記』によると。

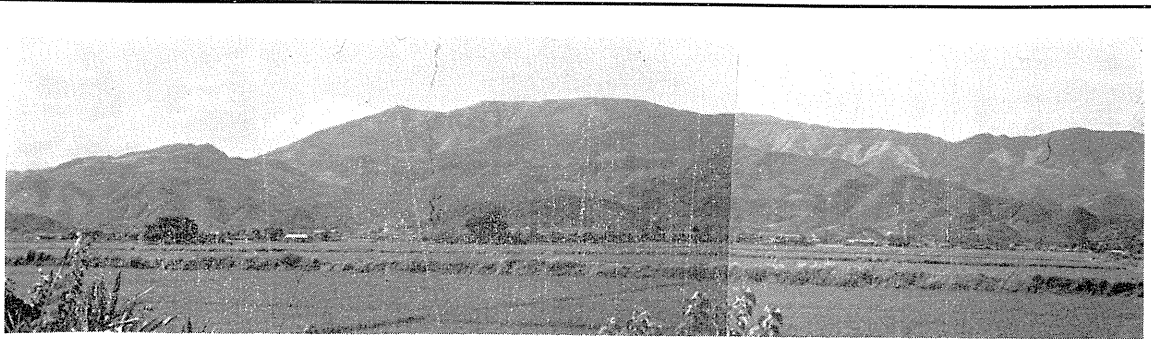
「……前は多々良浜とて、五十町の干潟あり。南に小川流れ、其南は箱崎とて四方一里の松原なり赤坂と松原との間砂の白き事、玉を敷ける異ならず。かくして菊地は其勢六万余騎と聞え……」

……北向に松原を後に当て、陣を

張る。將軍の御陣は、高尾張守師泰、宗都宮貞貞、島津氏久、千葉胤貞、大友千世松丸、大手の先陣を蒙りて三百余騎、多々良浜を前に當て、南向に陣とれば、新少弐頼尚(水城で破れた大宰少弐入道の弟)は手勢五百余騎、皆馬より下り立ち東手を支えたり、將軍の御勢都合千騎には過ぎざりけり……」

この様な状態で相戦つたため、菊地、阿蘇軍は砂浜を前に利が悪く、北風が吹き上げ、砂塵が揚がり、面もむけられず、その上將軍側は、東側の丘陵に陣を取つたので、矢で盛に對立するのに好条件で、武敏も矢傷を受け官軍の勢力は益々旺盛にして、その日に、阿蘇の後軍の中に疾くものが出来、背に敵を受け、惟直の軍は破られ、武敏は敗残の兵を率いて筑後の黒木の城にさり、それから豊後の玖珠の城で自害。

阿蘇大宮司八郎惟直、惟成兄弟と惟澄三人と軍勢約二百人は筑前から山を越えて肥後へ逃げ様と試みた。

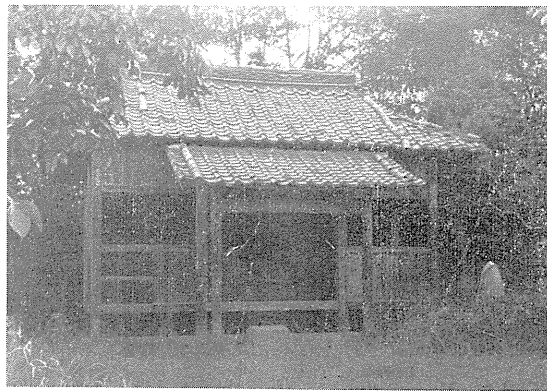


晴気荘考

原 正 勇

本号木下治之氏の「天山神考」の三社説は今後論考となろうが、この小論はその資料の一端ともなるうか。

「天山」は、伝説として「弁財天」が笠天(印度)から来た。九郎康弘は、山頂の霊泉に驚いて弁天池と名づけ弁財天の天をとって天山と名づけた。(佐賀新聞掲載・福岡博氏「天山の山名由来」)伝説は伝説として、私にはこの「九郎康弘」なる人物が見逃せない。なぜなら晴気の松葉部落に「寄居」なる小部落がある。その町道わき、晴気川沿いに「九郎堂」なる小祠が存在するからである。さらに川の東が「庄(荘)」部落であり、そこに俗称「いんにやくさん」の小堂も祀られている。この四点「寄居」「九郎堂」「庄(荘)」「いんにやくさん」を根拠に、天山神社の創建が文武天皇の大宝元年(七〇一)とこの伝説の人物との関係を想定し、さらに別の想定を立てこの「晴気荘」のテーマから私はこの人物はおそらく当時この地方の在地豪族の郡司層(あるいは写真の晴気全景左の高山が天山その直下の谷中腹に天山神社があり、谷の入口「寄居」「九郎堂」「印にやく社」がある



県王・團造か?)ではなかったか、と推定し、七〇〇年ごろの「晴気荘」を登場させるわけである。晴気の咽喉口を占めるこの「寄居」なる地名をかねて疑問視していたところ先日ふとしたことで、この地名は九州では鹿児島など三ヶ所において「豪族居館の址」と小城高校の内田隆久氏から御教示を頂いた。これは重大なことである。また庄に祀られている「いんにやくさん」は「印にやく社」であって国印や国衛正倉の鍵など

社 鑰 印

私地私民の廃止・班田収授・条理制など初期荘園の整備をして七二二年の一〇〇万町開墾計画・三世一身の法・墾田永世私財法(七四二)など班田農民の階層分化によって富豪が領主荘官となって質租経営となる。すなわち「預作者」「寄作者」「田堵」と呼ばれ房戸、寄口、寄人など問題を含むが「寄居」の地名も起る。初期荘園は、また田地も在地農民の「治田(はりた)」と荘園領主直轄地とに分かれるが「治田(はりた)」が「晴田

を保管する所で肥前国の国府があった大和町尼寺にも存在する。裏は低い山の谷上段にあって晴気川を挟んで西の「寄居」とは二〇〇米で双方の見透しもよく、南正面は峯山古墳群が彼等豪族たちの先祖よりの墳墓のようにくっきり浮かび南東眼下に晴気荘の平野田地を展開する場所である。

「荘園」といっても奈良朝より戦国末期に及ぶが、古代国家の土地制度は、大和朝廷の伸展とともに臣連伴造などの豪族による私地私民・年貢・奴隸まで売買された大化改新(六四五)は国司任用(六七六)・県主・国造から郡司が選任され旧来の在地豪族も終身官の郡司に組み込まれてゆく。そして七〇一年の大宝律令で、

「で、条里制でも「五条一四十六町二反治田里・斐田里・下神田・荒田八十五町」と記されている。こうして国司・郡司・里長が置かれるが旧来の県主・国造が旧態のまま支配権者であったり大豪族(筑紫火君など)もいて七〇一年代はまことに混沌期である。肥前国司が判然するのは七五〇年の吉備真備から(続日本紀)である。

しかしここでいえることは約一三〇〇年の昔晴気土着民から天山の恩人として祀られている人物であるとすれば信仰心深く民利民福を計った領主荘官檀那(社寺の代表保護者)ではなかったらうか。当時地方でも奈良の仏教興隆につれて郡司層の豪族が檀那となつて仏教の地方普及を果した知識の中心的存在であったからである。平安初期ごろの肥前国は十一郡から成り小城郡は三つの「荘」があった。晴気荘、大楊荘、赤目荘である。大楊荘は三月月乙柳付近で承暦五年(一〇八一)の立券では八十三町一段である。赤目荘は、三月月赤司付近で永承元年(一〇四六)の立券で二十四町二段となっている。晴気荘は正応五年(一二九二)の注文で百町となっており天山神社は六町八段と記されている。いずれもずいぶん後代の記録であるから一応の目安として考えたい。なお清水寺が八町。小城郡七百町。佐賀

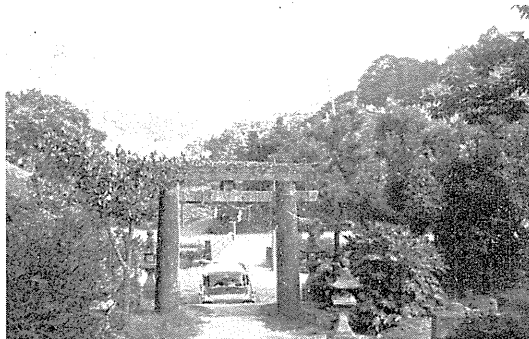
県内の公領が三千五百町に対し荘園が約一万三千町で四倍強に及んでいる。これら荘園は「寄進地系荘園」となって権門勢家(院官・貴族・大寺社)が領主となり、土着豪族が名主・荘官となって身を守り檀那となる。大楊荘、赤山荘は宇佐八幡宮領となっており晴氣荘は古く宗像文書にも記載され宗像大神宮領であったようである。この時代の究明も大切である。

さらに有力なのは古代官道がこの松葉の「寄居」前の晴氣宿を通っていることである。すなわち大宰府から基肆城、旭山、日の隈山そして佐嘉駅(うまやち)の国府尼寺を経て小城町三間寺から寺浦摩寺(東の拝門橋から西南の現県道にかけた寺域)を通して「庄(荘)」「寄居」を通り一本松峠から多久別府に至る。現在の国道二〇三号線より北一〇〇米山裾寄りの旧道であった。

こう考えてくる「寄居」「九郎堂」「庄(荘)」の古代官道上の東西線と北は晴氣谷正面奥に鎮座する天山神社、そして南は大楊荘(乙柳)との境界がはっきりしないが、「一の坪」、戀ヶ里、久蘇ヶ里、大戸ヶ里、江津ヶ里を初め西川、池上門前そして牛尾山の若一王子大権現(本地十一面観世音菩薩、開山は良厳、日本四大別当に列し福長寿院別当坊)は多久別府所地区に及ぶ両子山(古代の烽が日隈山と結ぶ)北坊、大門などの

地名を残す大勢力を想うとき、七〇〇年ごろの晴氣荘の枢軸としてこの晴氣谷入口の地理的位置は、まさに扇の要の場所として「寄居」「九郎堂」「庄(荘)」「庄」とはいよいよ動かせない存在である。さらに六世紀中頃「寄居」「庄」とは、目と鼻の位置にある峯山鏡山の古墳群と想起すれば農耕集落からの歴史豪族の墳墓として興味は尽きない。

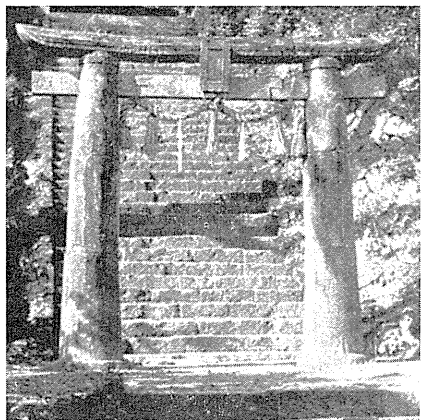
一面、神社、寺院についても、神祇官の確立が七〇一年の大宝令ごろであり、聖武天皇の天平年間(七三〇ごろ)「神名帳」が出来官国幣社や「神戸」「神田」も設けられ、八世紀後半から位階授受が始められる。国司が従五位下で「十二町」であるから、正五位下の天山神社があるから、



六町八段ぐらゐは当然であろう。また肥前国の尼寺の国分僧寺、国分尼寺の建立が天平勝宝八載(七五六)ごろと推定されており、「大願寺廃寺」全様、晴氣の「寺浦廃寺」もおそらくこのころの地方豪族の造寺造仏事業の勢力によるものではあるまいか。そしてこの「寄居」と隣合せに門光寺・中善寺の部落名が連なり、松葉の「池」そして岩蔵の天山神社と岩蔵寺が隣り合せであると同様晴氣の天山神社の南面三〇米晴氣川を挟んで権現(観音)山の小丘東側下段が「喜左一さん屋敷」と呼ばれ「本山廃寺」の址で「天授院」という寺であったことを指摘しておく。こうして「天山神社」と「本山廃寺」とを軸にして固有の神祇信仰が六世紀前半頃仏教の伝来となり大化の改新後も白鳳、天平時代の国家仏教さらに八世紀頃から神仏習合の風潮がおこり、平安中期になると本地垂迹説(伊勢神宮の天照大神の本地は大日如來だの如き)となって神社と寺院の併置、神前で僧侶が読経し僧侶の神像も作られる。「弁財天」の伝説もこう考えて

【写真説明】  
晴氣の天山神社より正面晴氣谷入口を望む  
鳥居の左柱の上方遠い山が「庄」部落。

くるとうなずかれ、九郎康弘の存在もいよいよ八世紀初めごろと考えられるまいだろうか。こうして天山神社を取り巻いて晴氣谷内だけでも天台密教の修験場「中山家」(中善寺)「岡本家」(本山の「城山」の麓)も最近まで伝わり、「豊前坊」「志音坊」「五輪堂」さては「本山廃寺」の入口参道には「大神宮碑」(俗さんやさん)の碑群が現存する。さらに「岩屋瀧」「八天さん」、神社東の「小松山」はおそらく「小松山観音」を祀る基山町の大興寺(藤原時代中期ごろか?)と関係はありはしないだろうか。郷の木晴氣宿、自分の地名や円城寺、古館、天山の姓なども興味深いがそれよりも「古墳」と「城山」の二つは見逃せない。すなわち寒気自音坊より山の神への入口、町道上段丘に、峯山古墳群と等高線上



「古墳」の数穴、それに一本松部落山上に数多く存在する。さらに本山の神社前の山が(寒気の間)「城山」である。「寄居」豪族の城址か(あるいは別人か?)興味深い材料である。

最後に晴氣の天山神社は明治六年郷社に、同十六年県社に列せられておる。山頂の上宮、川内の中宮(中継地)本山の下宮本社、そして例祭には出分(県道沿い)入口の鳥居までお下りお上りがあり一〇四六米の天山の真南で真正面に位し、祭祀、参詣の登山道も三社中一番近く容易であることを挙げておく。

以上のことから七〇〇年前後の晴氣荘から更に詳細に探求すれば漸次三社説解明の鍵が握られてゆくのではあるまいか。

(つづく)

牛尾神社に、二基の肥前鳥居がある。一つは、慶長二年(一五九七)の造立銘を有する古い石造鳥居であつて注目される。この鳥居柱に陰刻された銘は、肥前州小城郡牛尾山神宮寺奉造立石鳥居二柱国主大檀那錦島信濃豊臣勝茂朝臣慶長二年丁酉卯月吉日(以上略)

末の志 幕志

祇園太郎

(2)

○真木和泉守

大野梁村翁の添書を齎し、河野鉄兜を播州に訪はんとて蓮池を出立し、路を久留米に取り同地の真木和泉守保臣に邂逅したのである

此の保臣は久留米瀬の下水天宮の神官にして、夙に動皇の大義を唱へ其の熱誠の迸り義烈の溢るゝ所天下の志士をして紫溟の一角に保臣あるを識認せしめ当時動皇家泰山北斗たりし人である。祇園太郎の斯の人に邂逅するや互に胸襟を披いて語り蓋を傾けて旧知の如きの観ありしは同気相感じ同類相引くのであらふ。殊に久留米は寛政の昔高山正之が「謹て天下の士に謝す」との一言を留め、終天極地の憤涙を呑みて屠腹せし土地柄として主客両雄が感懐を膺一層深からしめたる事を思はるゝ

千歳川岸の石塚崩るとも君に誓いし言は違へじ

と歌い保臣に示せしを見れば其熱契する所の深かりしことを想像せらるるのである。

○婦人の景仰

祇園太郎の久留米に入る一連十日間も滞在した。蓋し行手を急がぬ旅なれば保臣等も友垣を結びたる為に勿々に去る能はざるに由るのであらう。此際氏は米藩の土人土上彦一氏方を東道の主人となし居たるにや、田鶴子、千代子と云へる二婦人より贈りし左の和歌がある。

米藩の土上彦一氏方へ肥前の祇園君まいられければ

降る雨にみちしほりたる糸萩に

いとしもたにも見る人も哉

田鶴子

我やとの庭の糸萩いとほすに

来ますは嬉しみやひとの伴

我もまたます男ならば草枕

旅行く人のともたらしませ

千代子

とあるを見れば、如何に景仰せられて居たかを想ふべきである。

○鉄兜を訪ふ

斯くて真木和泉其の他の友に別れ筑前に入り赤馬関を渡り中国路の長



佐野竹之助のメリヤス手貫

とあるを見れば、如何に景仰せられて居たかを想ふべきである。

亭短歌に泊りを重ね遂に播州に達せしかば綱千村なる鉄兜の家塾を訪いて弟子行を以て足を留めることゝなつた。鉄兜の名は熊、字は夢吉、通称は絢夫、鉄兜又は秀野と号し星巖門下の高足にして山禽叫絶夜寥々 無限春風恨未消露臥延元陵下月 満心花影夢南朝は鉄兜詩集中の傑作にして人口の膾炙する所である。

○時事の視察

祇園太郎の河野鉄兜塾に在るや学業を励み修養を積む事を怠らざりしは勿論なるが、本是れ志士を以て自ら任じ天下に為すあらんとするの志を抱けば播州の片田舎に整伏するのみを以て能事畢れりとする者ではない。然れば鉄兜の許可を得て屢次京阪の間に往來して各藩の有志者と交際し時勢の趨く所を窺い居たのである。然るに王室の式微は此の時に至り益々甚しく幕府の専横は此時に至り弥々加り殊に当世の志士即ち幕府の目にして以て浮浪の徒と称する人々に対する圧迫は其の極に達し、有名な安政の大獄を起し吉田松陰、頼三樹三郎、梅田雲浜、橋本景岳等の幾多名士が一網打尽の奇禍に罹り、相前後して断頭場裏の露と消へたるはこの頃であつて、国民をして切齒扼腕に堪へざらしめたのである。

○桜田の血雨

此の時に當りて幕府の要路に立ち圧迫の張本たりしは大老伊井掃部直弼である。渠は鉄血主義の人

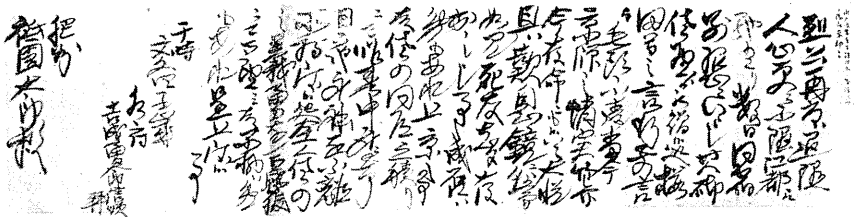
として志士の崛起は其の施政を沮害する所以なりと認むるや、志士論客を物色して厳刑に処し何等顧慮する所も無きより渠は天下の怨府となり其の肉を啖はずんば已むまじとまで憤られ居た

果せるかな万延元年三月三日渠は幕朝に対し

て重三の賀詞を述べんが為

先駆後従

の行列厳めしく、今しも桜田門外に來たるや降り積む雪を蹴て殺到したるは水府の浪士佐野竹之助、斎藤監物及び薩藩の有村治右衛門等の十七名にして大老の家臣が猛烈なる抵抗を試みるを事とせせず物の見事に直弼を屠り天下の志士



吉成勇太郎の書状

の為に積憤を齊したのである。祇園太郎が此の快挙に加り居たりとは想像し難きも或は其の議を與り聞き居たるにはあらざるか。其の故は過般の五十年回法筵の席上に陳列せられたる遺物中に「水府義士佐野竹之助の着たる命也数(めいやす)の小手」なるがあり、看來れば現今に於けるめりやすの手貫なるが其の頃は「命也数之小手」など稱して珍重せしと覚ゆ。右は水戸藩士吉成勇太郎信順より祇園太郎に向け態々送り届けたる竹之助の形見である。蓋し親戚の故無き祇園太郎へ形見を贈れるを見れば平生の親交を思ふべきである既に快挙の首魁たる佐野竹之助と親交ありしを見れば或は其の議を與り聞ぬとも限らぬのである。其の快挙に用いたる「命也数之小手」を贈り來たるは此間の消息を漏らせしにあらざるか。且く疑ひを存じ置く。

本稿は祇園太郎没後五十年忌の時、某新聞に連載されたものである。

(以下次号)

小城郷土史研究会

会員募集します

小城町の歴史、考古、民俗などの調査研究に熱意のある方を募ります。

会費は一ケ年度に千円。申込みは中央公民館内的小城郷土史研究会事務局まで。

永田武次郎海軍大尉の手紙

旅順港外で戦死

日露戦争の勇士

御兄様も愈御出征被成候  
由、武運芽出度らん事を偏  
へに祈居候、御兄様之御本  
望ハ遙かに陰ながら祝居候  
一筆申上候、先便を以て干  
代田より第十二水雷艇隊へ  
転勤仕候事は申上置候通り  
に御座候が、愈去廿九日第  
五十三号水雷艇に乗組申候間右様  
御承知被下度候、又先便申送可之  
如失念仕候事有之候、そは私之礼  
服類在中せる礼服箱一個佐世保相  
原益功様へ御預申置候、理由ハ右  
礼服類は戦地不用に御座候のみな  
らず、若し戦死等之節ハ身柄之代  
りを相動可申為に御座候、右御承  
知置被下度願上候、十数日前と異  
なり昨今の戦地附近一概に左程寒  
からず風波も余り大ならず至極結  
構に御座候、御安神被下度願上候  
鉄三智字体之三育御日附被下度願  
上候、又本人へも申遣すべき□候  
□へども艇務多端不本意ながら見  
合候間右に御伝被下度願上候、尚  
御母様御撰養偏へに願上奉候、先  
ハ御見舞券要用申上候、如斯ニ御  
座候、早々頓首、  
十一月一日 武次郎  
御母上様  
大尉が戦死する一ヶ月前の手

紙である。  
水雷艇第五十三号艇に乗組、礼服  
類を戦死の時の遺品として残し、  
しかも弟鉄三への三育(智字体)  
を母親に頼むところに戦場にある



武人永田大尉の風格を彷彿とさせ  
る。御兄様とは永田小太郎氏(後  
少将)のことである。氏はその後  
歩兵大尉として戦場に赴く。  
七月九日付の手紙では「其後戦  
争も追々と佳境に入り、小子等扼  
腕罷在候」とあり、青年士官の心  
意気がうかがえる。また、上村艦  
隊が警戒する玄界灘において、ウ

ラジオ艦隊が跳梁し常陸丸などの  
輸送船が撃沈されたことについて  
「此度の戦争ハ國運を暗したるも  
のにて、國民と雖ども覚悟充分な  
るべき筈に付、少々の痛みハ堪へ  
ざるべからざる事と存候、又決し  
して世間に如何しき風評共有之候  
ても万事御心安かに御撰生被遊度  
祈上候」とあり、戦時における國  
民のあり方に一つの姿勢をしめし  
ている。まだ配遇者のことについ  
て「小子配遇者の事に付色々御焦  
心の段難有御礼申上候も時  
節柄余り彼是御評議も却て  
小子戦死等の際、恨を残す  
に過ぎざる事と相成も不被  
計候」とある。

第3回 旅順港閉塞隊江戸丸乗組員 (○印永田大尉)

十月二十九日付の手紙は  
大尉が水雷艇五十三号艇の  
艇長になった時のもので「  
此度水雷艇に乗込候は、元  
来小子の性格に適合候次第  
故、従前より尚一層為邦家  
尽粹可仕候。併し危険の程  
度は今迄より大なる事と存  
候間、今改めて先度閉塞隊  
に行たる時遺髪として艦に  
置きたる分を芽出度紀念と  
して御送申置候」と決死の覚悟が  
うかがえる。

旅順港閉塞隊、水雷艇乗組など  
最も危険な任務につきながらも  
淡々とその心境を述べるところに、  
永田大尉の人物がしのばれる。

柴田花守の画像について

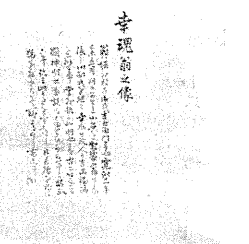
この度有田家文書の中に左のよ  
うな肖像画がでてきて、今日まで  
柴田花守の自画像であるといわれ  
ていたことが訂正されなくては  
いかなかった。有田家文書の肖像  
画と小城に伝わる(池田正人氏所  
蔵)肖像画は、ただ服装が異なる  
だけで同人物であることがわかる  
右下には「花守之印」という印鑑  
が押してあり、両方とも柴田花守  
が描いたものであることは確かだ  
である。有田家文書の肖像画には讀  
がついており、その内容は次のと  
おりである。



柴田花守の写真

幸魂翁之像  
翁ハ堀江村の御氏吉右衛門か子  
也。寛政十一年己未五月朔日に  
生れ、小名を袈裟次郎とよひ、  
後に川副氏を継いで幸助と改。人

の吉凶禍福を弁る事掌を指か如  
明也。こは古にいへる顕神明の  
憑談のたとひならむか。安政六  
年弥生此かたをうづし、且其徳  
を祓て号をおふみとて聊其よし  
書しるしつ。  
この肖像が堀江村出身の占師幸  
魂翁(川副幸助)であることがわ  
かる。柴田花守は明治十五年神道  
実行教の初代管長となる人であり  
有田家当主の有田均氏は神道に深  
く傾倒した人といわれ、神道の先  
覚者として幸魂翁の肖像を描き所  
持する深い関係があったようだ。  
なお柴田花守の写真が一枚だけ伝  
えられており、戦前太田保一郎氏  
や須賀神社神主陣内不可止氏によ  
って「佐賀郷友」「肥前史談」に  
使われていた。(岩松記)



有田家文書所蔵



池田正人氏所蔵

岩松要輔稿

(完)

# 初の小城郷研総会開く

☆……小城郷土史研究会の第一回総会を、去七月六日……☆

☆……小城町天山閣において開き、会則の議決を行な……☆

去る四十一年八月三〇日に天山閣に集うた四、五人の有志、東島猛氏を中心とし、その名称も「小城郷土史研究会」となる。そして「会報」の発行、公民館報に「ふるさとの歴史」の連載、あるいは町文化展等の協力など、研究と普及活動に微力を尽してきた。

この間、町当局の御理解のもとに補助金をいただき、会員も四〇人を越えるまでに生長。

この期にあたり「小城郷土史研究会」は新たなる研究会へと脱皮すべく、ここに第一回の総会を開くに至ったが第一である。

## 小城郷土史研究会会則決まる

◎本会は郷土の歴史、考古、民俗地理その他に関する研究を行ないかつ郷土文化の発展に貢献することを目的として、各事業を行なう  
○会員の会費は年額千円とし、四月に徴収する。

## 本会役員決まる

本会則により次の方々が役員に選出された。(任期は二年)

- 会長 中島品麗桜
- 事務局長 岩松勇輔

- 編集 木下 巧
- 監査 金丸盛登
- 副田 肇

## 史跡探訪会に集う

### 松尾山などへ十三人



天継院で吉浦氏の説明を聞く

なお、本会への連絡・会費の納入などは、中央公民館内本会事務局までお願いします。(木下記)

## 歴史講演会を開く

第一回の郷土史研究会総会に当って、佐賀県教育委員会社会教育課主査木下之治氏を迎え「天山神雑考」と題して約一時間にわたって講演をお願いした。これの要旨を本紙二頁に掲載させていただいた。

去る八月二十四日(日)午前八時半から午後二時半まで岩松地区において小城郷土史研究会主催の第一回の史跡探訪会を実施しました。参加者は十三名で、はるばる佐賀から三名の方が特別参加されました。空模様心配されていたが案に相俟して朝から大変よい天気。小城町中央公民館前に午前八時半集合。集まった人は十三名。新聞をみて佐賀からかけつけた人が三人。出席簿に住所氏名・職業を記入して事務局が用意した今日の探訪会資料プリントを一部ずつ

うけとる。頭には麦わら帽、作業着をつけて、運動クツのいる人たち。カメラを肩からさげている人も三、四人いる。八時四十分には中島高麗桜会長の簡単な挨拶があつて、早速、探訪コースに従つて出発。小城高校の東側を通つて国道にでて、役場と農協の間を通りぬけて永岡小路にでる。水町家老屋敷跡、川副二水先生旧宅跡などを資料プリントをみながら通過。左手に秀峰天山をバックに真白にはえる新築の小城中学校をみながら大門に向う。大門のはずれに三間山円通寺と彫刻してある大きな石柱や石祠群をみる。板碑の古い形のものが無造作にころがっている。円通寺の参道を真すく北にとり天継院に向う。天継院では、住職吉浦精耕氏から水町地蔵尊、留守経昌墓、西正豊墓、富岡敬明墓、松田正久墓、横尾経久墓などの案内をいただく墓地内が整頓とされていてすがすがしい感じ。もっとくわしく話を拝聴したい所であったが予定により円通寺に向う。再興されて六五〇年余りの伝統をもつ円通寺は、住職飯盛安献氏から寺の由来、県の重要文化財持国天、多聞天立像、若訥和尚、瑞蔵和尚、雪蔵和尚、蘭溪道隆(大覚禪師)の墓などの説明をうける。天保十二年の火災と明治維新の廃仏毀釈運動によつて往時の姿は望めない。ただ、本堂に移し保管し

てある勅使門の額は往時をしのばせる。大きな山門をくぐり、石段を登りつめた所に松尾山光勝寺の本堂がそびえる。住職北村大成氏が宗教大会出席でご不在のため、寺総代の大野氏から説明をうける。編島氏によつて再建された本堂本尊の十界曼陀羅、日親堂の彫り物、千葉胤貞墓、各建物内の案内をうけた。帰りには、閑叟公の額がかかっている座敷で、お茶の接待を受ける。本堂前で記念撮影。山道を通り、途中道にまよいながらようやく十二時頃に岩蔵寺に到着。岩蔵寺の座敷でお弁当を広げさせてもらい、寺山の下刈作業の仕舞会のお酒までふるまわれた住職の提慶全氏・寺総代納富・相川両氏から岩蔵寺の由来・虎御前判若経、如法経会について説明をいただき、裏山にある虎御前殿の腰掛石、如法経塔、薬師堂などをみせてもらう。午後二時過ぎに記念撮影して岩蔵寺境内で解散した。

小城の歴史 第5号

発行者 小城郷土史研究会  
(小城町中央公民館内)

発行日 昭和44年9月30日

印刷所 音成印刷所